
シンポジウム

論題 中世哲学におけるアリストテリズム

——『デ・アニマ』を中心として——

司会 名古屋大学 大鹿 一正

提題：〈こころ〉の位置——アリストテレスと
トマス

東京大学 山本 巍

提題：知性・魂・形相——トマスの場合

福井大学 水田 英実

(於 清泉女子大学 1986. 11. 23)

司会

大鹿 一正

本年は「中世哲学におけるアリストテリズム」の二回目として、昨年の存在論に続いて自然学におけるそれを主題とすることは既に予定されていた。然し、物理学的諸問題に関しては、アリストテレス自然学は、周知のごとく、中世の自然科学の発展の阻止要因としての評価が定まっており、科学史的な意義は別にしてポジティブな論題とはなり難いことが予想され、いきおい『デ・アニマ』が中心とならざるを得なかつた。尤も、魂論の中核である知性は、アナクサゴラス以来、アリストテレスが deus ex machina の名を呈したごとく天地万有の運動その他の万能の根源でもあったのだし、また、13世紀の西欧に盛期スコラを齎らしたアリストテリズムの魂論は、具体的には、ラテン・アヴェロイズムに見られる知性単一説を頂点とする魂論であり、人間の知性は月を動かす第九天球の知性実体とも同定される体のものであったのだから、『デ・アニマ』は、まさしく、自然学の中心的位相にあつたといえよう。もっとも、提題者の論旨、質疑の焦点

は自から知性的魂の離在性と不死性に集まり、結果的には、*metaphysica specialis* としての魂論になったようである。

二人の提題者は、トマスの『デ・ウニターテ』を接点として、山本氏は、ソクラテスを承けたアリストテレスというギリシア哲学そもそもの原点から『デ・ウニターテ』のトマスを望みながら『デ・アエマ』を分析され、水田氏は、その同じ『デ・ウニターテ』のトマスから出発して、16世紀のカエタヌス、ポンポナッツィまでを射程に納めて、可能知性、能動知性夫々の内在性、離在性、不死性をめぐって生じた諸問題を提起整理され、稀に見る壮大な舞台でのシンポジウムが行なわれた。

山本氏は、テキストに使用されている言語のレベルという新しい概念を用いて『デ・アエマ』を分析し、第一・二巻と第三巻との言語使用のレベルの相違を指摘される。すなわち、第一・二巻は、世界の中の物個体を基準にした言語レベルであるのに対して、人間知性の理論を展開する第三巻は、「このわたし」を核心とする言語レベルであって「ところ」とは「わたしのところ」であり、「わたし」と「ところ」が分離していない。つまり、「ところ」が知性認識するとは「わたし」が知性認識することにはほかならないというアリストテレスの立場が指摘される。これは更に、トマスの『デ・ウニターテ』の言語レベルがこの第三巻のそれと共通することの指摘に進み、『デ・ウニターテ』におけるアヴェロエス批判の論拠となる、「この人間が知性認識する」というトマスの基本的立場が、第三巻のアリストテレスのそれに沿うものなることが示唆されるにいたる。意表をつく立論から見事なトマス支援が生じたといえよう。

水田氏は、アヴェロエスの『デ・アエマ』解釈、すなわち、可能知性・能動知性両者の離在、に反対して両者の各個人への内在を主張するトマスの立場に与すところから出発し、トマスに好意的であるべきトミストのカエタヌス、同じくトマスを高く評価するアレクサンドリストのポンポナッツィが、にも拘らずトマスに反対して可能知性のみの内在を主張すること、更にそこから結果する可能知性の不死性の疑問視をとりあげ、兩人とトマスとのアリストテレス解釈の是非について問題提起される。そして「この人間が知性認識する」という基本的立場から両知性の内在を説くトマスの解釈の正当性を立論し、加えて、可能知性の不死性を論証するトマス理論を展開された。

図らずも、二人の提題者が全く異なる方向から共にトマスの『デ・アエマ』解釈を支援するという結果となり、シンポジウムとして論争をひき出し難い状況になったが、間

題が問題であるだけに会員一般の関心も強く、両知性の区別、内在性、離在性、不死性をめぐって、区々の立場から相当細部に亘る質問が相継いだ。応答また、両提題者とも自信滿滿、躊躇逡巡するところなく返って、活潑かつ滑らかな質疑応答に終始した。問題の性質上、疑点の解消は望まれるべくもないが、問題に対する展望の深まりと広まりが得られたであろうことは看取された。シンポジウムの意義は果されたものと信じている。

提題

〈こころ〉の位置
——アリストテレスとトマス——

山 本 巍

1

人間は世界の中に生まれ落ち、そこで生き、そこで死んでいくものである。そしてその世界は、人間はもとよりあらゆる種類の自然の物、人工の物に満ちている。こうした物たちは何よりも一つ一つの個体、即ち物個体である。われわれ人間はそれ自身物個体として、世界の片隅、時間空間上のほんの小さな部分に棲んでいる。そして各種各様の物個体と多彩に接触、交渉しているのが、われわれの至極当り前の日常生活である。服を着る、リンゴを食べる、花に水をやる、車に乗る、人と相談する。こうした物個体との交渉に組み込まれた行動がわれわれの日常生活の脈絡を構築している。實在とは何よりも世界の中のこうした物個体、われわれの日々の生活の基盤に根を置いている物個体である。そしてそれはまたアリストテレスにとって哲学の基底（第一の実体）であった。

アリストテレスが *De Anima* で「こころ」について考察するに当り、その着手点としたのがこうした物個体である。「人びとは人間のこころについてのみ考察しているように見えた」というのが先人達に対するアリストテレスの診断である（402b 3—5）。人間のこころのみを性急に求めれば、それがいかなる言語レベルで語られるべきかを見過すことにもなりかねない。そこでアリストテレスが「最も共通な説明方式」として求めたのが「こころとは可能態で生命をもつ自然の物の第一の現実態」であった（412 a 27